＊文圃文献類従 73＊　著―影山 三郎 ／編・解題……阪本 博志

朝日新聞家庭面「ひととき」欄の三十年
―戦後マスコミ読者論

1951年「ひととき」欄（『朝日新聞』）は、
家庭面復活にともない、影山三郎の発案により設けられた。
当初は女性著名人に原稿を依頼していたが、
52年から一般読者の投稿を掲載し、54年にその投稿者数は二万人にも達し、
「ひととき」は無名「主婦」たちが発言する場として、
生活記録運動の一潮流を生み出すに至った。
地域のサークル活動と異なり彼女たちの思いが全国紙で紹介されることで、
顔見知りの範囲を越えて、全国的な論題として提示されたのである。

新聞読者投稿欄のメディア研究が極めて少ないなか、
戦後における女性の新聞ジャーナリズム参加を記録した連載（1968～82年）を集成する。

◎推薦文

ジャーナリズム史を捉え返すことにつながる

福間 良明（ふくま よしあき／立命館大学教授）

新聞の研究は多くあるものの、読者投稿欄の研究はきわめて少ない。ことに、ジェンダーの視角があるものは、ごく限られる。一般の女性読者は新聞の投稿欄を通して、どのような思いを公にしてきたのか。戦後の早い時期には、そのことで社会的な軋轢はなかったのか。また、新聞社内でそれはどう受け止められてきたのか。ともすれば男性主義的なジャーナリズムの価値観が広がる新聞社のなかで、作家でも文化人でもない女性が意見を語ることが、どう捉えられていたのか。

本資料集は、『朝日新聞』で「ひととき」欄を生み出し、それを軌道に乗せた影山三郎の回想録（『マスコミ市民』連載の「戦後マスコミ読者論」）や関連するエッセイを集めたものである。言うまでもなく「ひととき」欄は女性読者の発言を掲載するコーナーであり、1951年10月にスタートしている。そこでは、農村における女性の地位や女性の政治参加、炭鉱町における女性のありようなど、さまざまな問題が取り上げられた。地域のサークル活動やミニコミ誌もないではなかったが、彼女たちの思いが全国紙で紹介されることで、それは当事者たちの顔見知りの範囲を越えて、全国的な論題として提示された。

その意味で、「ひととき欄」はさまざまな階層の女性の意見を浮かび上がらせるものでもあった。新聞は、記者や文化人、作家など、文筆に長けた層の文章にあふれているのが常だが、「ひととき欄」は農村や中小商店の女性など、意見を文字として公にする機会がきわめて限定的な人々、しかも女性の声を取り上げてきた。この資料集に収められた影山の文章には、「ひととき欄」に込められた思いやそれを築き上げるまでの労苦、社内のさまざまな軋轢が綴られている。「ミニコミ」と「マスコミ」の重なりと隔たり、階層・格差、ジェンダー―本資料集は、こうした観点からジャーナリズム史を捉え返すことにつながるだろう。

「マスコミ」と「ミニコミ」の複眼的な視点から書かれた戦後日本のジャーナリズム史

水溜 真由美（みずたまり まゆみ／北海道大学准教授）

「ひととき」は、『朝日新聞』の家庭欄にもうけられた女性の投書欄である。女性文化人によって口火を切られた「ひととき」に一般読者の投書が初めて掲載されたのは、1952年1月7日のこと。以来、多くの女性読者が「ひととき」を読み、「ひととき」のために書くことに熱中した。

1950年代は、主婦を始めとする一般の女性が「書く」ことを通じて社会に参加し、ネットワークを広げた時代である。そうした女性たちの動きは、平和と民主主義を求める世論を生み、原水爆禁止運動を始めとする社会運動に結実した。「ひととき」は、女性が市民としての自覚を持ち、政治や社会にもの申す大きなうねりを生んだ源流の一つである。「ひととき」は、1950年代を代表する女性サークルとして知られる草の実会や希交会が誕生するきっかけともなった。

「ひととき」の生みの親は、『朝日新聞』の家庭欄担当デスクを務めた影山三郎である。当初、『朝日新聞』の首脳部には「ひととき」に対する少なからぬ反発があったというが、やがてそうした反発は読者からの大きな反響によって霧消した。女性たちのネットワークに連なる「ひととき」は、男性中心のマスメディアの中で「ミニコミ」に近い役割を果たした。影山の視点から「ひととき」の30年間をふり返る本著作は、「マスコミ」と「ミニコミ」の複眼的な視点から書かれた戦後日本のジャーナリズム史としても極めて貴重である。

Kanazawa bumpokaku
金沢文圃閣

朝日新聞家庭面「ひととき」欄の三十年
―戦後マスコミ読者論

新聞社社史には記述されてこなかった
「ひととき」をめぐる女性読者と
影山自身の軌跡がここでは見事に描かれる。
「マスコミ」と「ミニコミ」の重なりと隔たり、
階層・格差、ジェンダー

――本書は、こうした観点から
ジャーナリズム史を捉え返すことにつながるだろう。

「ひととき」は、女性のなかに、
自分で書く、そのために自分で考え
視野をひろめる、他の人びとと話し合う、
という運動をひろげていった。

著―影山 三郎
編・解題―阪本 博志（宮崎公立大学）
造　本―A5判・上製糸かがり（別巻並製）・総808頁
揃　価―47,000円（別巻のみ分売可）
刊　記―2019年10月　ISBN978-4-909680-53-2

一巻（310頁）
「連載・戦後マスコミ読者論」1〜75
（『マスコミ市民』20号（1968年11月1日）〜95号（1975年9月1日））

二巻（310頁）
「連載・戦後マスコミ読者論」76〜150
（『マスコミ市民』96号（1975年10月1日）〜170号（1982年6月1日））

別巻（188頁）ISBN978-4-909680-54-9（別巻のみ分売可　8,000円）
【編集復刻資料】【翻刻新組資料】（抄）
- 「減頁でやっと暇―火花とぶぬかみそと文化の両極 上」（『新聞協会報』、1953年6月）
- 「有難い読者の批判―女性に窓を開いた家庭欄 下」（『新聞協会報』、1953年6月）
- 「「ひととき」6年の歩み」（『新聞協会報』、1958年1月）
- 「現代新聞と読者―地域小新聞を手がかりとして（対談）」（『新聞研究』、1975年4月）

＊解題、収録巻別記事一覧、推薦文

別巻では単行本未収録の記事・座談を集成!!

著者紹介
影山 三郎　かげやま・さぶろう　1911~92
東京都生。1937 年　東京帝国大学文学部心理学科卒。朝日新聞社、1965 年『朝日ジャーナル』編集長、その後、立教大学・横浜市立大学で教授なども務めた。主著として『新聞投書論―民衆言論の100年』（1968年）などがある。

関連書のご案内

『高度成長期の〈女中〉サークル誌 ―希交会『あさつゆ』』
【全十巻（八巻・別巻2）】
編・解題―阪本 博志
揃　価―100,000円

『東京南部 サークル文化運動史　年表・記録』
【全二・別巻】
著―城戸 昇／編―道場 親信／解題―池上 善彦
揃　価―37,000円

Kanazawa Bumpokaku
金沢文圃閣
〒920-0867 金沢市長土塀2-16-30
Tel 076-261-8884　Fax 233-3111
□書店様へ…ありがとうございます
直接小閣までお申し込みください
図版はすべて本書より
価格は税別　050／10／4000